

---

# いつか君と見たあの空の下で

May

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつか君と見たあの空の下で

### 【Zコード】

N4153B

### 【作者名】

May

### 【あらすじ】

僕の大切な存在の君は死んでしまった。この世に僕を独り、残して――。二年後にやつて来た転校生は、君にそっくりだった。彼女が、僕の運命を大きく変えてゆく――

いつか君と見たあの空の下で、僕は、奇跡を目撃する。

君と出逢ったのは、小学校に上がる前の春。

僕の住んでいた町は、とある海のそばで、そんな海の砂浜で、無邪気に波と遊んでいる君を見つけた。

君と友達になつてから、の僕の人生はいつも輝いていた。

君と特別な関係になつた十歳。

初めて君と唇を重ねた十一歳。

君の熱を感じた十五歳。

全てが順調だった。——あの時までは。

同じ高校に進学した僕たちは、毎日、楽しく過ごしていた。  
高校一年生の夏休みの最終日、僕たちは、僕たちが出逢ったあの砂浜に行つた。

台風が近づいていて、とても風が強かつたけれど、雲一つない、綺麗な空だった。

でも、何故だろう。その時、とても嫌な予感がしていただ。その予感は、的中してしまつた。

無邪気に波と遊んでいた君が突然来た大波に掠われたんだ。僕は、急いで君を助けようとしたが、君を見失してしまつた。それは、僕の人生の中で、一番の後悔。

何で、もつと君をよく見ていいなかつたのだろうか。

翌日、その砂浜から一キロほど離れた別の砂浜で、君の水死体が発見されたんだ。

あれから一年経つて、僕はどれだけ成長しただろうか——高校三年生になった僕は、せっせと受験勉強に勤しんでいた。別に行きたい大学があつたわけじゃない。けど、こうして勉強するこただけが、君へのせめての償い。

夏休みも終わって、新学期に入つた初日、僕は自分の運命を変える出逢いをした。

「転校生を紹介するぞ」

「こんな、忙しい時期に來た転入生が、僕の心を癒す。

「森屋アヤカです。よろしくお願ひします」

僕は、君が生き返つて、僕の目の前に現れたんじやないかと、思うほど、君にそつくりで、しかも、神様が悪戯したのか、君と同姓

同名なんだよ。信じられる?

守屋あやか、それが君の名前だつたね。 僕は嬉しかつた。

もう一度、君とやり直せる そう思った。

けれど、すぐに現実を突き付けられた。

彼女と君は、あまりに違い過ぎた。

君は歌うのが得意だつたけれど、彼女はピアノが得意だつた。

君は人と話すのが苦手だつたけれど、彼女は誰とも仲良く話した。

君は大人しかつたけれど、彼女は元気に走り回つていた。

彼女は君じゃない。

わかつていても、彼女のそばにいると、君のそばにいるように錯覚してしまつ。

ホント、君にも彼女にも、申し訳ないほどに。 — 学期の終業式の日、僕は森屋アヤカに告白された。

これは、また神様が悪戯しているのだらうか。

断る理由もなく、僕は彼女と付き合つことになつた。  
彼女を、君だと思って。 ホント、申し訳ない。

元旦に一緒に初詣に行つた。

その時、僕は彼女に君のことを話した。

彼女は、目を見開いて驚いていた。

嫌われても、仕方ない。けれど、君の反応は、僕の期待を大きく反すものだつた。

「 それでも、構わない」

彼女の姿は凜としていて、神々しく見えた。

「だから、あなたのそばにいさせて。 お願いだから」

僕は、そんな彼女を振り切つてまで、一人ぼっちでいる勇気はなかつた。 ごめん、僕は君以外の女の子に恋をする。

四月、僕たちは同じ大学に進学して、キャンバス・ライフをそこそこ楽しんでいた。

僕たちが進学した大学には、少し変わった行事があつた。  
三日間、泊まりで京都、奈良、鎌倉を回り、歴史的建造物を調べて回るそうで、原則は二人一組で、勿論僕は、彼女とペアになり、一緒に回ることになつた。

彼女ははしゃいでいた。 この行事は、勉強という名の肩書きが付いたペア旅行だ。 僕たちは一日目に鎌倉に行って、はしゃぎながら勉強もした。

夜は、一緒の部屋で寝て、ドキドキして、なかなか寝付けなかつた。

次の日は早朝に朝一の新幹線に乗つて、奈良に向かつた。  
朝が早かつたから、僕たちは新幹線の中で熟睡した。

夢を、見た。 それは、暖かい、過去の思い出。 彼女に起こされて、僕は目を見ました。 僕は、泣いていた。 夢を見ながら泣いていた。 それに気が付いて起きた彼女が、僕がうなされていると勘違いして、慌てて起こしたんだ。

僕は、忘れようとしているのかも知れない。——君のことを。  
「ごめん、ホントにごめん。

一日田の奈良は、とりあえず急いで建築物を回った。この夜、約束していることがあった。

「一緒に寝よう

忘れない、忘れたくない。矛盾だ。僕はホントは、何をしたいんだろう。

その夜、僕は初めて、彼女と肌を重ねた。君としてではなく、ちゃんと彼女として。

幸せだった。

この幸せは、壊したくない。

「ごめん、ごめん。

三日目は京都に行き、都の生活を堪能した。  
お菓子は美味しかったし、街の風景も風流があつてよかつた。  
結婚して住み着くなら、都会よりここがいい。

楽しかった三日間もあつといつ間に終わって、僕たちは夕方の新幹線に乗って帰った。

この三日間のことは、けして忘れない。

大学二年生の春、僕は僕の両親に、彼女のことを見せて紹介した。

両親は、動揺を隠せなかつた。当たり前だ、君と同じ顔で、同じ姓同名の彼女を息子が連れてきたら、誰だつて動揺するさ。でも、もう決めたんだ。僕は、彼女と生きるんだ。この先、ずっと。

「この年の

「あの日」

と同じ日に、僕はあの砂浜に彼女を連れて行った。

「この砂浜に来たのは、何年ぶりだろ？　君が死んでから、恐くてここには来れなかつた。」

風が強い。雲一つない綺麗な空。

この状況は、前にも見たことがある。

ああ、これが

「デジヤビュ」

といつやつだ。

僕は慌てて、海の方を見た。

波打ち際にいる彼女目掛けて、大きな波が押し寄せてくる。何もかも、あの時と同じ。

波が彼女を飲み込んだ。僕はすぐに追い掛ける。

嫌だ、嫌だ。

もう、大切な人を、失いたくはない。

必死に泳いで、泳いで、彼女の身体を捕まえた。

もう、絶対

に放さない。アヤカ、アヤカ！

「…………ち……や……ん……」

「<sup>しゅん</sup>え？」

「<sup>しゅん</sup>ちゃん」

「ああ、確かに僕の名前は旬だよ。だけど、彼女はちゃんとつけて呼んだりはしない。ちゃん付けで呼ぶのは、昔から、一人だけ。」

「久しくぶり、旬ちゃん」

「あやか、君だけだ。」

「会いたかった」

ホントに、あやかなのか？

「旬ちゃん、私、ずっと待つてた。旬ちゃんが、この砂浜にまた来てくれるのを、ずっと待つてたの」

「…………何で？」

「伝えなきやいけないことがあるから、今、この娘の身体を借りて  
るの」

君は、何を伝えたいんだ？ 僕に、一体何を？

「匂ちゃん、私が死んでから、ずっと、自分は幸せになっちゃいけ  
ないって、思つてた」

そうだ。君の命が絶えてしまつたのに、僕が幸せになる資格な  
んて、ない。

「そんなこと、ないよ」

君は、僕にどうしてほしいんだ？ 一緒にになりたいのか？  
「この娘と、幸せになつて」

……君は、僕に君以外の人と幸せになれつて、言うのか？  
「匂ちゃんが幸せにならないと、私、成仏できないよ。だから、  
幸せになつて」

僕は涙を流していた。僕は、幸せになつてもいいのか？  
「でも、私のことは、忘れないでね」  
忘れない、君のことは、けして忘れない。

「バイバイ、匂ちゃん」

彼女の身体が、砂浜に静かに倒れた。僕は彼女の身体を支え、  
叫んだ。「あやか――――――！」

二年後、六月。

「アヤカ、入るよ？」

扉を開けた先には、純白のウエディングドレスを身に纏つたアヤ  
カがいた。

僕も白いタキシードを着ている。

そう、今日は僕たちの結婚式だ。

教会の外に出ると、沢山の人たちが拍手喝采を送つてくれた。  
彼等の前で、僕たちは誓いの口付けをした。  
そばにいるよ。見守つてるよ。

不意に、あやかの声が聞こえたような気がした。

君は、いつでも僕のそばにいるんだね。  
僕は、結婚するよ。

幸せになる。君に言われたよ!」

君と彼女がリンクする。

Fin

(後書き)

こんな、経験の薄い私の小説を読んでいただき、ありがとうございます！これから連載ものをどんどん投稿していきますので、応援してくれる人は、ぜひ、また読んでみてください！ 2000.1.20・自宅にて、May。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4153b/>

---

いつか君と見たあの空の下で

2010年11月3日13時56分発行